論　文

日本海軍における出身地と人間関係―堀悌吉中将の失脚と関連して―

渡　辺　滋

はじめに

組織の構成員の出身県というのは、現在ではあまり意識されなくなっている。その組織の性格によっても異なるが、一億二六〇〇万人（二〇一八年現在）の日本人のうち、たとえば大分県の人口は一一四万人（〇．九％）である。つまり一〇〇人の組織で数名以上の大分県出身者がいたとすれば、その組織の立地なり機能なりがそうした片寄りの背景にあると考えるべきだろう。こうした現状に対し、過去においては組織のなかで同じ出身地域の人間同士が結びつくことで派閥を構成したり、それを呼び水として同郷の人物を組織へと呼び寄せるようなことが当然のように行われていた。

とくに軍部の場合、明治初期の建軍期の事情も反映して、長く「陸の長州」・「海の薩摩」と称される露骨な出身地偏重人事がまかり通っていた。こうした維新期の特殊事情に起因する地域「閥」の系譜は、昭和期に至ってすら寺内寿一陸軍大臣（山口）・財部彪海軍大臣（鹿児島）など、ある程度の残存が認められる。とはいえ、大正期のうちには政策中心の新派閥が台頭（たとえば陸軍における統制派と皇道派、海軍における条約派と艦隊派）するなか、次第に取り払われていくといってよい。ただし軍部の組織内における地域「閥」自体は、敗戦まで一定程度、機能し続けていた。本稿では、そうした関係の具体例として、戦前期の日本海軍の事例を取り上げて検討する。

一般に軍隊生活においては、兵営あるいは軍艦などにおける共同生活の時間が長いこともあって、組織・部局への所属意識が強くなる傾向がある。また士官以上の場合は、幼年学校（陸軍）・兵学校（海軍）などにおける全寮生活の段階からはぐくまれる「同期の絆」というものも、大きな紐帯として機能していた。こうした現象は、現在の我々からも理解できる。一方水面下では、こうした要素よりも強い紐帯が存在していたという指摘もある。それが、本稿で検討対象とする「地縁」を紐帯とする「地域閥」である。

たとえば海軍兵学校において、学生は出身地別に集まり頻繁に催しを行っていた。その典型が、夕食後の練兵場における散歩である。以下に、体験者の回顧談を挙げておこう。

夕食後は…一斉に観兵場の原の上、一列横隊で上下混級同県人の散歩、東西の一線を住復して急がしい世話ばなし、お国訛を遠慮なくむき出して、生徒の数少ない県は寂しく、数の多い九州、長州や東京、広島は大威張りで列の両翼時々他県と衝突して折れる(1)。

こうしたあり方については、大正初年頃になると内部からも批判が生じ始めていたらしい。たとえば大西新蔵（海軍兵学校四二期。以下、卒業期のみ表示）は、「鹿児島県人は島津公を殿様扱いにし、薩摩藩、島津藩の者であることを誇りとした。…東京人はコスモポリタンであった。…藩閥意識は零である。同県人の教官だからと言って、再々訪問に出かける連中を内心では軽蔑した」と回顧している(2)。そうした風潮のなか、大西の一期下のクラスで、「われわれは皆同じ天皇の赤子なのだから、出身県別にグループを作って歩くことは無意味ではないか。県別に分れるのはやめたらどうか」という提案が出された際、「自分の考え方を他人に押しつけるようなことは殆どしない」・「多少言いたいことがあっても我慢してしまう」・「他人に対する不平や不満も殆どおもてには現わさない」有馬正文（四二期）が、むきになって「あくまでも従来通り同県人グループでやるべきだと言い張」り、現状維持ということに落ち着いたこともあった(3)。有馬は鹿児島出身ということもあって、人一倍、郷土とのつながりを重視していたのだろう。

このように、当時の人々（たとえば海軍でいえば一八〇〇年代生まれの世代）にとって「地縁」は、生活のみならず仕事を遂行する過程においても、現在からは想像も付かないほど大きな要素として言動を支配していた。以下、戦前期の日本海軍における事例を取り上げ、その具体相を検討していきたい(4)。

第一節　大分県の事例

まず取り上げるのは、大分県の事例である。別稿と直接関係する事例ではないとはいえ、この事例によれば、出身県という要素から陸海軍をまたぐ大きな紐帯が生じたことを確認できる。

日本海軍で最期の軍令部総長となった豊田副武（一八八五～一九五七、三三期）は、大分県杵築町の出身である。彼が海軍を志したのは、同郷の先輩で杵築中学校の一学年上に在学していた堀悌吉（一八八三～一九五九、三二期）の影響による(5)。海軍部内では陸軍嫌いで通っており、常々陸軍のことを「馬糞」・「けだもの」などと呼ぶことで知られていた(6)。その彼を一九四五年五月に軍令部総長の地位につけた米内光政（海軍大臣）は、選定の理由について陸軍側との意思疎通をスムーズに実施するためと説明している（後述）。大の陸軍嫌いということで、たとえば東条内閣組閣の際など海相候補として挙げられながら東条側の忌避により実現しなかった程の人物である。海軍部内における陸軍への反発は広範に存在したとはいえ、わざわざこうした人物を、戦争末期という微妙な時期に、陸軍側とのスムーズな意思疎通を目的に抜擢するというのは、一見とち狂っているようにも思われる。

ところがこの人事は、陸海軍の統帥部（陸軍参謀本部と海軍軍令部）の緊密化という点に限れば、結果的に功を奏するのである。及川古志郎軍令部総長を更迭した際の米内海相の説明によれば、陸軍大臣阿南惟幾（一八八七～一九四五、竹田出身）・陸軍参謀総長梅津美治郎（一八八二～一九四九、中津出身）の二人は大分県人で、彼らと話のしやすい同郷の豊田副武を海軍軍令部総長に抜擢するということだった。「それで、君（及川）やめさせて、豊田にするからな」と提案された際、及川自身も「自分ではどうしても阿南、梅津を抑えることができない。豊田だったら同県人でもあり、腹を割って話し合って、うまくやってくれるだろう」と思ったらしい(7)。

ところが、あれだけ陸軍嫌いで通っていた豊田が、就任後は陸軍側の主張に引きずられて、米内の期待とは逆に徹底抗戦の主張を強めていった。こうして「ミイラ取りのはずの豊田総長がミイラになった」のは、同郷意識が豊田の陸軍嫌いを打ち消すほどの威力を持っていた可能性を暗示していよう。この時期、米内が東郷茂徳外相との会食の席で自分の秘書官（麻生孝雄）を指して、「この男は大分だよ。あと三人大分だからな、注意せんと危いよ」と冗談を言ったのも(9)、大分三人組のシンパシーを揶揄した側面がある。

結局この人事は、降伏決定までのプロセスに複雑な要素を加えてしまう。一九四四年八月から翌年八月まで設置されていた「最高戦争指導会議」は、首相・外相・陸相・参謀総長・海相・軍令部総長の六名で構成され、戦争の遂行に関する最高意思決定機関として機能していた。成立当初には、首相：小磯国昭（栃木）・外相：重光葵（大分）・陸相：杉山元（福岡）・参謀総長：梅津美治郎（大分）・海相：米内光政（岩手）・軍令部総長：及川古志郎（岩手）という陣容で、大分二名・岩手二名というややいびつな構成を取っていた。これが鈴木貫太郎内閣の成立時（一九四五年四月）、首相：鈴木貫太郎（千葉）・外相：東郷茂徳（鹿児島）・陸相：阿南惟幾（大分）・参謀総長：梅津美治郎（大分）・海相：米内光政（岩手）・軍令部総長：及川古志郎（岩手）となり、翌月には陸軍の人事異動に対応して軍令部総長が及川（岩手）→豊田（大分）に変更されたことになる。つまり大分出身者は一減・二増した結果、最高戦争指導会議（定員六名）の半数を占める結果となったのである(10)。とくにメンバーのうち抗戦派三名がいずれも大分出身者という状況には、異様な感が否めまい。

実は陸軍側において、鈴木内閣期における大臣・総長の二人が大分県出身者で占められたのは偶然だった。小磯内閣における杉山元陸軍大臣の評判は芳しくなく、部内においても交代の必要性が検討されており、その有力候補の一人として阿南惟幾が挙げられていたことは、既に指摘されている通りである。実際、阿南自身の日記によっても、彼を大臣に擬する声が早くから上がっていることは確認できる(11)。しかし阿南自身は、南方（第二方面軍）から中央に戻った後も大臣就任を渋り続けていた。大臣就任の意思を持たなかった阿南が最終的に受諾するのは、鈴木貫太郎首相が直々に阿南の就任を要請してきたことによる(12)。阿南は侍従武官時代に鈴木（侍従長）と深い信頼関係を築いており、鈴木のもとで働くことを快諾したのである(13)。

そもそも梅津は、「人格高潔、識見高邁、寡黙謹厳、欠点のないのが欠点と言われた人」であり(14)、同郷者を重用することを基本的に嫌っていたらしい。ところが例外的に、阿南との関係はきわめて深いものがあった。二人は出身県が同じというだけでなく、最初の勤務地（歩兵第一連隊）が同一で、その後も次官―局長／軍司令官―師団長／軍総司令官―方面軍司令官などとして長く直

属関係を続けてきた。そうした背景から、この時期の二人の関係は「およそ他に類を見ないほどの親しい間柄」とか、「阿南は梅津に兄事していた」とか評されるほど緊密になっていた(15)。

このような陸軍側の人事に対応する形で、海軍側がトップの一人を大分県出身者に変更したのは偶然ではなく、また最高戦争指導会議の構成員の半数を占める同県出身者が揃って抗戦を主張し続けたことも、おそらく偶然ではない。こうした展開を見る限り、陸軍側の二人のペースに乗せられて、豊田の行動が主体性を欠いていった印象は否めない。

豊田が最後まで抗戦を主張し続けたことについて、彼自身は「陰では密かに終戦工作をやっていた」・「当時としては、終戦の工作をやるにしても、その気配をあからさまに他に示す訳には行かない。どうしても二枚舌を使わねばならぬ」と弁解している。しかし関連史料を見る限り、彼が終戦工作をしていた形跡はまったく確認できず、豊田が米内に対して戦時中の自らの態度を釈明した際、米内が「何も言わずに撫然としておった」(16)のも当然だろう。

阿南の自決（一九四五年八月）・米内の病死（一九四八年四月）・梅津の獄中死（一九四九年一月）の後、極東国際軍事裁判で無罪判決（一九四九年九月）を受けた豊田は、二週間後の九月二十日、虎ノ門の晩翠軒（北京料理）で杵中十日会に出席し、同郷先輩の堀悌吉らを前にして「独リデハシヤギ気味デ放談」している。それを黙って聞いていた堀は、帰宅後、「自己反省ノ気持ナド少シモ無イ」・「空威張ノ負ケ惜ミ」と批判的なメモを残したうえで、戦争末期に抗戦を主張し続けた姿勢に関する弁明についても、「（前もって）米内氏ニソウ云ツテ置クベキモノダ、アトデ釈明シタノデハ益々奇怪」と切り捨てている(17)。同郷意識を一因としてミイラ取りがミイラになった結果、海軍部内のみならず尊敬する同郷人の信頼までも失う結果となったのは、皮肉というほかあるまい。

第二節　岩手県の事例

前節では、敗戦直前の時期、米内光政（一八八〇～一九四八、二九期）海軍大臣が及川古志郎（一八八三～一九五八、三一期）を軍令部総長から更迭して、豊田副武を後任とした背景を分析した。すでに触れたが及川は米内と同じ岩手県出身で、県内における出身地こそ違うが盛岡中学の後輩に当たる人物である。

米内（二九期）は首相就任時（一九四〇年）に予備役に編入されたのち、一九四四年七月に四年ぶりに現役復帰し、海軍大臣の地位に就いた。そして直後の八月に自らのサポート役として軍令部総長の地位に就けたのが、及川古志郎（三一期）である。数年前に現役を退いていた米内にとって、現役最年長の将官（永野修身元帥を除く）及川が自らを支える体制こそ、安定維持の良策だった。同じ最先任でも、より実務能力が高い長谷川清大将（三一期、福井）を採用しなかったのは、及川が同郷の後輩だからであろう。

この点について、単に後輩というようなレベルではなく、米内と及川は非常に強い信頼関係に裏付けられた実行者と計画者という関係だったという指摘すらある(18)。もしそうだとすれば、粘り腰のある米内を、実行力こそ低いが判断力の高い及川が裏面からバックアップするという構図が想定されよう。

ちなみに米内の郷土愛の強さは、一九四〇年代ですら米内・及川を中心に岩手海軍会が運営されている状況からも(19)、うかがえる。米内に対する郷土側からのラブコールも強く、たとえば国語学者の金田一京助（一八八二～一九七一）は米内の追悼文集に一文を寄せ、年代も境遇も異なり人生のなかでほとんど交渉も持たなかった米内について、「追慕の情は、あえて何人にも劣らない」・「颯爽としたお姿が今でも目に浮ぶ」と回顧している(20)。

地縁による人間関係がこうした「郷土愛」に支えられている以上、他地域出身の人間に一定の疎外感を与えるざるをえない。たとえば、のちに米内の腹心として終戦工作を進め、敗戦後は副書記官長（東久邇宮内閣）なども勤める高木惣吉（一八九三～一九七九）は、米内が最初の海軍大臣を勤めていた時期、第一次近衛内閣で板垣征四郎が陸軍大臣に就任した際、「板垣中将陸相親任式挙行。…新陸相ハ新東条次官ト共ニ岩手県出身。海陸相共、岩手県出身ヲ以テ堅ムルコトトナレリ」と記している（『高木惣吉日記』昭和十三年（一九三八）六月三日条）。つまり陸相：板垣征四郎（盛岡中学校→幼年学校）／次官：東条英機（東京府・父英教は盛岡藩士）／海相：米内光政（盛岡中学校→兵学校）／次官：山本五十六（長岡中学校→兵学校）と、軍部の大臣・次官（計四名）のうち三名が岩手県関係者に占められたという分析である(21)。全体としては意図した結果でないとはいえ、たしかに第三者から見れば気味の悪い状況が現出している。実際地域によって強弱には差があったとはいえ、海軍の場合は山形・愛媛・高知・山口・佐賀・鹿児島などにおける郷土重

視の傾向は強く、米内たちの出身地である岩手もそれらに次ぐ印象がある。

なおこの時期の米内を海軍次官として支えた井上成美は、自らの若年時に出身地による出世差別が当たり前のように行われていた状況を回顧したうえで、「いつそれがなくなったかというと、米内さんの力ですな。結局、米内さんまでは、まだやっぱりだめでした」[22]と総括する。たしかに海軍全体の人事について、米内はそのような積弊を改善したのかもしれない。ただし以上見てきた様に、彼の周囲に限定すれば同郷者の配置率はかなり高い。ちなみに大将へ昇進した井上成美が次官を退任（一九四五年五月）した後、その後任に任命された多田武雄も米内にとって盛岡中学の後輩にあたる人物である。この後、多田は仕事らしい仕事もせぬまま、病気を名目に出勤しなくなってしまうのだが、ここらへんも米内の岩手重視の姿勢が裏目に出た人事といえよう。

第三節　福井県の事例

ここでは、ロンドン海軍軍縮条約をめぐって海軍部内で生じた軋轢（詳しくは別稿で言及）と関連して、福井県出身者の相互関係に触れたい。一九三〇年代半ばの福井県出身の代表的な海軍軍人としては、岡田啓介大将（一八六八～一九五二、一五期）・加藤寛治大将（一八七〇～一九三九、二四期）・長谷川清中将（一八八三～一九七〇、三一期）の三名が挙げられる。

このうち、とくに岡田と加藤の関係は同じ福井藩の士族出身者ということもあって非常によいものだった。岡田は回顧録のなかで、加藤と「軍縮問題（一九三〇年）以前は、ともかく親しくしていた」ことや、その性格についても「正直いちず」「可愛いところのある男」と好評価を示している[23]。『加藤寛治日記』においても、岡田の体調（あるいは見舞い）に関する記事や、その親族の死去などに関する記事は全般的に詳しい。岡田の二回目の海相辞任（一九三三年一月）後（つまり仕事上の面会の必要性が低下した後）も、なんやかんやで隔月くらいの頻度で会っている。

加藤が海軍軍令部長に就任した人事も、当時の人事権者（海軍大臣）が岡田だったことと関連している。『加藤寛治日記』によれば、昭和四年（一九二九）一月十九日に加藤と岡田は二人で柳橋の柳光亭で会食を楽しんでいる（おそらく、これが非公式な面接試験だったのだろう）。その後、二十一日の午後に海軍省に呼び出された加藤は、岡田海軍大臣から「軍令部長の就任内示」を受け（二十一日条）、「真に光栄の限りなり」（二十三日条）と述懐している。急死した珍田捨巳侍従長の後任に、軍令部長の鈴木貫太郎（一八六八～一九四八、一四期）が就任することになった際、岡田がその後任に加藤を就けたのは様々な要素を勘案した結果だろうが、個人的な好評価を前提として、いざというときに同郷の加藤ならば御せると計算した結果でもあろう[24]。

ところが両者の関係は、この後、ロンドン海軍軍縮条約への対応を廻って、次第に悪化していく。加藤の側近だった人物（福井県出身）も、「昭和五年のロンドン条約問題以来、岡田、加藤両大将の間柄は非常に冷却していました」と証言している[25]。とはいえ、加藤は加藤なりに岡田の要請を、ある程度は受け入れる態度を維持し続けている。日記では「不二相変一機会主義なり」（『加藤寛治日記』昭和五年一月二十一日条）・「岡田の態度不可解也」（同年九月二十九日条）・「不二相変一老獪なり」（昭和七年五月六日条）などと不満を述べつつも、たとえば加藤と首相などとの面会の際には、常に岡田が後見人の如く同行している（同年三月二十七日条・四月一日条）[26]。また加藤が軍縮条約をめぐって軍令部長の辞表を提出しようとした際には、すでに軍事参議官となって第一線を退いていた岡田が、わざわざ部長室まで足を運び説得を試みている。その際、加藤は「君は辞表を撤回しておれにどうせいと言うか」・「君の謂うことは始終変わるから困る」（『岡田啓介日記』昭和五年（一九三〇）六月七日条）などと文句を言いつつも、一応、岡田の話を最後まで聞いている（該当日の加藤日記は欠）。この場合、加藤は翻意しなかったとはいえ、岡田の説得こそが加藤へ再考を促す最終手段だったことは間違いない。

加藤の側近たちの手になる伝記によれば、正直一途な加藤と老獪な岡田という対比の末、この時期以降、両者の交流はほぼ途絶えたかの如き描写も散見されるが[27]、実際にはそうでもない。たとえばこの数年後、岡田が海軍大臣に再任された時期、加藤（軍事参議官）は岡田に連れられて料亭に行ったことがあった。その日は、酔って裸になった加藤が、福井弁で岡田に説教を始めたという[28]。説教しているあたり、加藤の岡田に対する不満の存在も確認できるとはいえ、心底不快に思っている相手に採る態度ではなかろう。この段階に到っても、両者間の絆は維持されているのである。

ところで、ここで岡田が加藤を連れて料亭に行ったのには、二つの意味があったと考えられる。一つは、現実社会における加藤の岡田への不満を看過で

きず、ガス抜きを計る目的である。もう一つ注目されるのは、会場の設定任務にかこつけて、大臣秘書官（矢牧章）を同席させている点である。単に加藤のガス抜きのみを考えるのであれば、愛知県出身の矢牧の同席は効果を低める要素にしかなるまい。彼を同席させたのは、自分と加藤の間のつながりが維持されていることを、自然な噂として海軍部内に広める意図もあった可能性が高い。

なお、岡田が首相に就任した際（一九三四年七月）、その背後に西園寺公望がいることへの不快感から、加藤は同郷人による祝賀会に出席しなかった（『加藤寛治日記』昭和九年七月九日条）。すると翌朝、「「平泉澄博士来訪、…予の対岡田態度に付自重を懇切に勧め来る。多謝々々」（同十日条）とあるように、同郷の後輩である平泉澄（一八九五～一九八四）[29]が、加藤の態度を戒めに来ている。これをうけて、「岡田総理祝賀会に激励演説を為す。評判宜し」（同一九日条）とあるように、加藤は機嫌を直している。

このように個人的な人間関係のレベルでは、同郷人のネットワークなどに支えられて、岡田と加藤の間の結びつきは相応に維持されていた。しかし政治的な立場としては、両者は条約派の巨頭（岡田）と艦隊派の総帥（加藤）という相容れぬ間柄である。

こうした状況が続くなか、両者の後輩に当たる長谷川は、綱渡りのようなバランス感覚を発揮する必要に迫られていた。日常の加藤は、あきらかに艦隊派の総帥として、様々な情報を政界・社会に向けて発信するアンテナの役割を担い続けていた。それに対し海軍省としては、放送の内容によってはアンテナの電圧を下げてもらったり、場合によっては放送自体の停止をお願いする必要も生じてくる。そうした際に重宝されたのが、長谷川である。とくに一九三四年五月に大角海軍大臣の下で彼が海軍次官に就任して以降は、海軍省から加藤への面倒な連絡（あるいは省と岡田との間の連絡）は、おおよそ長谷川が請け負っていた[30]。長谷川から加藤への発言は「忠告がましいこと」が多かったようであるが、だからといって加藤の意向をすべてに渡って押さえつけていたわけではない。別稿で詳述するように、長谷川の判断のなかには堀悌吉の更迭をはじめ、加藤の意向を重視したと覚しきものもみられ、そうした点で両者の間でバランスをとっている感は否めない。長谷川の場合も、同郷者としての特権を行使して加藤を掣肘するだけでなく、加藤側の影響を強くうけている側面は見逃すことができないのである。

第四節　長野県の事例

ここでは、別稿で検討する堀悌吉中将の失脚に関連して、長野県出身者の事例を分析する。これまで紹介した事例とは異なり、それほど強くもない同郷人間のつながりを勘ぐられた事例である。

当時の海軍において、将官人事は人事局長が立案し、海軍大臣の了解を得て、年末の進級会議に掛けられることになっていた。そうした手順を念頭に置けば、堀が無役になった際の人事局長だった阿武清（一八八六～一九三五、三三期、山口県）と、予備役に編入された当時の人事局長である小林宗之助（一八八六～一九七五、三五期、長野県埴科郡）の役割は大きなものがあった。このうち、本節では後者をめぐる人間模様を検討したい。

堀の失脚過程の全般について詳しくは別稿で述べるとして、ここで注目したいのは、一九三四年当時、山本五十六が堀に対して「塩沢ガ同県ノ小林宗之助トグルニナッテ折角ノ苦心ヲ水泡ニシテシマッタ」（堀悌吉「回顧録」『堀悌吉資料集 三』）と憤慨していた点である。この時期、堀を失脚から救うために、海軍兵学校同期（三十二期）の山本五十六・嶋田繁太郎・吉田善吾らは、無役の堀を就任させるためのポストを探していた。そこで目を付けられたのが、同じく同期の塩沢幸一（一八八三～一九四三、三二期、長野県上伊那郡）の航空本部長の職だった[31]。この件で嶋田が軍令部総長の伏見宮に直訴するなど、着々と詰めていた話を、土壇場になって「塩沢ガ同県ノ小林宗之助トグルニナッテ」ぶちこわしたというのが、先の山本の怒りの理由である。つまり「同期のエースを救うために、航空本部長のポストをゆずってやれ」と言われて表だって反対できないとはいえ、内心は気乗りしなかった塩沢と、その意向を汲んだ人事局長（小林宗之助）が側面から突き崩したというのが、山本の理解であろう。

その際の塩沢と小林を結ぶ媒介項とみなされたのが、「同県」（長野県）出身という点である。実際、塩沢が「小林ニ様子ヲ聞キ、且ツ吉田カラ聞イタ話ヲシタラ、小林ガ「ソンナコトヲシテハ、殿下ハ非常ニ困ラレルダロウ」ト云フ」（堀悌吉「回顧録」『堀悌吉資料集 三』）と述べている点からは、塩沢―小林の間に一定の結びつきが存在したことは間違いない。また「一九三四年十月九日付 塩沢幸一書簡」（『堀悌吉資料集 三』）によれば、塩沢はこの段階で人事局の内部案を入手しており、これは小林の協力なしにできることでは

ない。しかし小林の協力は、その程度で止まっていた可能性が高い(32)。

人事局長としての小林にとって重要なのは、人事の決定に到るプロセスである。この場合のように、省部の枢要にある人びと（たとえば嶋田軍令部第一部長（軍令部の№3）や、吉田軍務局長（海軍省の№3））が、不当に失脚させられそうな同期生を救うという理由であれ、各自の職権と無関係な人事へ介入してくることについて、人事局長として好意的な対応はできなかったろう。彼らがやっていること自体は、堀の失脚を狙う人びとと同じだからである。確かに小林は塩沢に同郷のよしみで情報提供くらいはしたのだろうが、両者が結託して計画を壊したという山本の見解は、想像力の翼を広げすぎであろう。

近世の信濃国は数十のエリア（藩・天領・寺社領）に分かれて統治されていたこともあって、一つの国を一つの藩で占有していた地域（たとえば長州藩・薩摩藩）とちがい、近代以降にまとまった帰属意識は形成されなかった(33)。隣国とはいえ、せいぜい一〇程度の藩に分割されるに過ぎなかった山本の出身地（越後国）とは、まったく異なる環境に置かれていたのである。とくに伊那（南信濃）出身の塩沢と、埴科（北信濃）出身の塩沢の間で、強い同郷意識が共有されていたかは疑問も少なくない。逆にいえば、そうした「結託」を疑う山本側にこそ、過度に地縁を重視しかねない素地があったのではなかろうか。越後長岡藩の家老の家を相続した山本は、同世代人のなかでも抜群に郷土愛の強い人物だった(34)。ここでの山本は、自らの思いを他の地域の事例にまで当てはめてしまい、深読みしすぎた感が否めない。

山本たちのプランに賛同しなかったとはいえ、小林自身も堀の失脚回避をめざし水面下で対策は講じていた。たとえば反堀の傾向が強い海軍軍令部の雰囲気を緩和するため、課長クラスと堀との交流の場を設定しようとしたのは、その一例である(35)。こうした小林の行動は人事局長としての責任範囲を逸脱している感もあるが、別稿で詳述するように大角海軍大臣も堀には好意的なので、問題行動とは見なされなかった可能性が高い。

このような行動を見る限り、小林自身は堀に対して比較的に好意を抱いていた可能性が高い。堀の回顧録のなかに、当時、堀と小林が交わした会話が記録されている。以下に挙げておこう（堀悌吉「回顧録」『堀悌吉資料集 三』）。

昭和九年ノ正月頃、新人事局長小林宗之助氏ノ来宅ヲ求メ、軍縮当時ノ真相、上海ノ事実其ノ他ヲ色々話シテ聞カセタガ、小林ハ「実際ハソウカモ知ラヌガ、皆ソウ考ヘテ居ラナイカラ中々六ケ敷イ」トイフカラ、「ソレダカラ君ニ言フノダ」ト云ッテ置イタ。

この記事によれば、堀は退役に追い込まれる数ヶ月前、小林を自宅に招いて状況を説明し、好意的な対応を求めている。当時の堀は無役の中将にすぎず、本省局長の小林を自宅に呼びつけるほどの勢威はない。ここで小林が堀邸を訪問したのは、過去の上司・部下という関係によると考えるのが妥当だろう。

小林は、海兵三五期を入学成績二位・卒業成績三位で出た所謂「恩賜組」である。卒業後はフランス駐在・軍務局第一局員など堀とほとんど同じ経路をたどって、一九二六～二七年には国際連盟海軍代表としての堀に、代表随員として仕えている。その後も、ジュネーブ会議全権随員などを経て人事局長に就任するなど、比較的、在外任務の多い経歴を経てきたことが分かる。堀の回顧録（『堀悌吉資料集 三』）によれば、この時期の「国際連盟軍事諮問委員会の海軍代表部は自分と中佐の小林宗之助氏、大尉の荒木氏、後日宮崎氏の三人から成って居」た。このようなフランスや国連駐在を主要な経歴とする点を見る限り、小林の立ち位置は堀（三二期）や古賀峯一（三四期）の系譜を継ぐところにあったと考えてよい(36)。実際、小林が軍令部の課長クラスと堀の間を取り持とうとした時、軍令部側の情報を小林に伝えていたのは古賀らしく、ここからも小林がその系列と接点を持つ人物だったことが確認できる。

つまり本来、小林は人事局長の任を終えた後、戦隊司令クラスの任を経て、省部において相応の要職を歴任するはずの人物だった。ところが人事局長以降は、戦隊や要港部司令官をどさ回りするだけの「なかず飛ばすの境地」におかれ続け(37)、一九四〇年に舞鶴鎮守府司令長官となったのを最後に、一九四二年には戦時中にもかかわらず五六歳で予備役に編入されてしまう（中将の定年は六〇歳）。

こうした彼の経歴上の暗転は、既に指摘されているとおり(38)、人事局長だった時代に条約派の将官を退役させる手続きに関わったことと関係している可能性が高い。一九三〇年代半ばまでに、「大角人事」によって海軍部内の条約派将官の多くは退役に追い込まれる。ところが一九三〇年代後半になると、様々な要因から艦隊派が凋落し、結果的に堀の同期生たちが主要なポストにつく時期が続く。実際、小林が窓際ポストの舞鶴鎮守府司令長官に押し込められた一九四〇年から(39)、予備役に編入された一九四二年まで、海軍大臣（嶋田

繁太郎）や連合艦隊司令長官（山本五十六）など海軍の主要ポストは堀の同期生で占められており、次官も堀を尊敬することの厚い沢本頼雄という陣容だった。小林の立場の暗転が、こうした部内の配置と無関係とはいえまい。

しかし小林自身にしてみれば、彼は堀の予備役編入を主導した訳でもないし、個人的には堀の退役を阻止するためにそれなりの努力もしたつもりだった。戦後は沈黙を守ったまま九〇歳近い長寿を保って亡くなる小林だが、内心は納得のいかない部分もあったのではなかろうか。

第五節　山口県の事例　①末次信正

最後に取り上げる事例は、山口県である。そもそも山口県の場合、陸軍志向が強く、昭和初年まで目立った海軍軍人は多くなかった。そのため当時の山口県の人名事典などでは、県出身の海軍軍人の履歴に関する説明文のなかにまで切歯扼腕の類の表現が満ちている状況だった。

ここで実際に、海軍全体における山口県出身者の割合を確認しておこう。たとえば三五～四〇期の時期のデータ分析によれば、海軍兵学校の在校生を出身県別に見ると、山口県は山形・広島と並んで四位である（鹿児島は七位）[40]。前後の時期の卒業生名簿で出身県をチェックしてみても、一学年が二〇〇名弱の時期、ほぼコンスタントに三名以上を入学させている。昭和初年の山口県人口は一一〇～二〇万人（日本の全人口は六〇〇〇～六五〇〇万人）、つまり山口県は全人口の一．八％程度を占めていることを念頭に置くと、人口比相当の入学者は確保していることになる。また日本海軍が廃止されるまでに輩出された大将以上の軍人は七七名だが、このうち戦死による昇進六名をのぞく七一名には山口県出身の末次信正・沢本頼雄の二人が含まれる（二／七一＝二．八％）。戦死の事例（山県正郷）を含めた場合、その数は三名となる（三／七七＝三．九％）。いずれにせよ、大将昇進者の割合は人口比をはるかに越えていることが分かる。つまり戦前期の山口県人が、海軍における目立った活躍が少ないと不満を示すのは、あくまで「陸の長州」・「海の薩摩」と評される状況との比較にすぎないと考えられる。

ともあれ、そうした状況に転機が訪れたのは、昭和初年だった。末次信正[41]の連合艦隊司令長官への就任や（一九三三年）、山口県出身者として初の海軍大将への昇進（一九三四年）は、県人にとって前例のない慶事となった。一九三四年秋に故郷徳山へ海軍の全艦隊を率いて入港した瞬間は、末次の人生の一つのピークと言ってもよかろう。

このような経緯もあり、末次が昭和初年において海軍部内の山口県出身者が結束する際の核として機能したことは、当然の結果とも見なせる。ただし末次の場合、部内における自らの影響力拡大を目的として、積極的に地域閥を構築・運用していた印象が否めない。こうした紐帯は史料上に残りにくいのだが、関係性が表面化する局面も存在する。昭和八年（一九三三）～九年にかけて生じた堀悌吉排斥運動は、その具体例である。

この出来事について、堀の「回顧録」（『堀悌吉資料集　三』）から「同県出身」という要素でまとめている箇所を挙げておこう。

自分等ノ級ノ上級ニハ、級頭ニ同郷ノ枝原百合一ガ居ル。下ノ級ニハ、豊田ノ次席ニ阿武清ガ居ル。阿武ヲ立テル為ニ、先ツ豊田（貞次郎）ヲ落サントシテ之ニ難癖ヲツケテ居タガ、自分ハ枝原ニ取ッテハ一ノ競争者ト見ラレ、阿武ノ為ニハ目ノ上ノ癌デアッタニ違イナイ。従テ、一派ノ鋒先ガ自分ノ処ニマデ向ケラレテ居タコトハ、相像ニ難クナイ。即チ自分ガ一派ノ画策ノ下ニ、枝原ト阿武トノ間ニ居テ挟撃サレル形トナッテ居タノハ、少シ気ヲ付タレバ成程ト頷カレル処デアッタ。…人事局長ヲシテ居タ阿武ガ末次ノ意ヲ承ケテ種々画策シテ居タ。

以上の回顧によれば、末次を筆頭に、枝原百合一・阿武清らが堀の失脚を目論むという構図があったらしい[42]。このほか各種の情報も総合すると[43]、堀の悪評を流布することで彼を失脚に追い込もうとした人びとは、以下のような面々だった[44]。

名前	生没年	兵学校	出身	父親
末次信正	一八八〇～一九四四	二七期	徳山	末次操九郎（徳山藩士）
枝原百合一	一八八一～一九四四	三一期	防府	枝原栄吉
有地十五郎	一八八二～一九四七	三三期	東京	有地品之允（萩藩士）
阿武清	一八八六～一九三五	三三期	萩	阿武之介（萩藩士）
山県正郷	一八九一～一九四五	三九期	徳山	山県佐兵衛（徳山藩士）
石川信吾	一八九四～一九六四	四二期	山口	不明

こうしてみると分かる様に、東京出身の有地を除けば、いずれも山口県出身

者という共通点が見いだせる。偶然にしては出来過ぎており、彼らが末次のまとめあげた山口閥の中核メンバーだったと考えるのが妥当だろう。「はじめに」で述べたように、この時期の海軍では、薩摩偏重の地域「閥」が、台頭しつつある政策集団によって淘汰されていく状況が確認されるのだが、こうしてみると新たに台頭した政策グループ「艦隊派」の主要な構成要素の一つとして、末次を中心とする長州閥があったことは間違いない。こうしたあり方は、地域閥から政策グループへと重点が移動する際の過渡期の形態として注目に値しよう。

なお詳細は別稿で述べるが、このうち有地・山県などは表だって悪口を言って回っているだけであり、それほど重要な役割をになっているわけではない。全体計画を立案していたのは、末次ら頭脳系の人びとである。彼自身の残した日記類は公開されておらず周辺史料からその動きを分析するほかないが、重視されるのは阿武清（人事局長）と石川信吾（軍令部員）の二人である。彼らについては、次節以下で順次検討していこう。

第六節　山口県の事例　②阿武清

まず、阿武について検討しておこう。阿武の後任者である小林宗之助との関連で前述した通り、人事局長は地縁と関係する要素に基づく判断を極度に戒められる立場にあった。当然ながら、阿武にしてもそうした気配りはそれなりにしていたはずである。それにも拘わらず、同郷の末次らの思惑に沿った人事を進めているのは、一つには海軍の今後歩むべき道について、堀と阿武の考え方に大きな違いがあったことが挙げられるかもしれない。

堀がワシントン軍縮会議・ロンドン軍縮会議などで示した姿勢は、多少の不利益には目をつぶってでも欧米列強との協調路線を歩むというものだった。これに対し、阿武も軍縮問題に関して素人ではない。たとえば一九二七年十二月には軍備制限研究委員会の首席起草委員として「昭和十一年までの帝国海軍軍備計画」を策定している(45)。そこでの研究成果を踏まえてのことだろう、一九二九年七月三十一日には陸軍に対し軍令部第一課長として、米英間の軍縮交渉は「成立セザルベシ」と明言し、今後の方向性としては「現状ヲ保持」する程度が妥当との見解を示している（参謀本部第二課「昭和四年七月起海軍軍備制限（倫敦会議）綴」(46)）。こうした発言を見るかぎり、堀とは異なり、阿武は英米との軍縮交渉に消極的だった可能性が高いように思われる。

ともかくも、阿武が人事局長として進めた堀の左遷人事（第一戦隊司令官を解任し無役とする）は、数ヶ月の調整期間を経て、まずは海軍省・軍令部の上層部のみに開示された（一九三三年十一月七日）。その際、早速、人事の背景について吉田善吾（海軍省軍務局長）・古賀峯一（軍令部第二部長）・岩村清一（海軍省先任副官）らは情報交換している（『岩村清一日記』同日条）。日記に明記はされていないが、おそらく、堀の援護に積極的だった嶋田繁太郎（軍令部第一部長）から得た情報もまとめられただろう。以下に、その日の岩村の日記の後半部分を挙げておく。

吉田少将ノ依頼ニテ、古賀少将ノ所ニ行キ、堀少将・吉田少将ト会見。進級会議ニ於ケル堀少将ノ件ニツキ話ヲキク。
阪宅(堀)后(後)熟考、人事局長宅ニ行キ強云。

検討の結果として、岩村が「人事局長宅ニ行キ強云」ったのは、今回の堀に対する左遷人事が、大臣側ではなく人事局長のイニシアチブで行われたことを物語っている。海軍省の情報が大臣・次官・軍務局長の順に集約され、軍令部の情報が総長・次長・部長の順に集約されることを前提とすれば、省部の№3たちと大臣官房を預かる先任副官が集まって状況を分析した結論が、当日、退庁後の人事局長宅への抗議訪問という形で示されたことになる。押しが弱く、不満があってもなかなか示そうとしない岩村の性格からすると、これはかなり異例の行動だったと考えられる(47)。阿武の判断をめぐって、よほど腹に据えかねる情報を得たのであろう。ともあれ、この段階で結論が変更されるわけもなく、堀の左遷は既定路線として実施に移されることになる。

堀に好意的な大角岑生大臣や、穏健派の藤田尚徳次官、堀を救おうと運動中の局長・部長級の複数の幹部の存在にもかかわらず、どうして堀は左遷されるに至ったのか。当時、加藤寛治（軍事参議官）・末次信正（第二艦隊司令長官）は、少なくとも制度上は省部の人事に大きな影響力は持ち得ない立場にあったし、別稿で述べるように伏見宮（軍令部総長）も、堀の人事に関して積極的な関与はしていない可能性が高い。加藤らが外野で騒ぎ立てたところで、省部の幹部が一丸となって受け入れなければ、どうにかなる問題である。

やはりここで問題となるのは、人事の要を握る人事局長の去就ということになる。人事局の内部における人事処理の実態は現存史料の不足もあって明確で

はないが[48]、第一課の課員がそれぞれ兵科・主計課・軍医科・機関科などに分かれて人事案を作成し、将官級の人事については局長一人が担当する体制が採られていた[49]。

そうして作製された人事局案が正式な決裁に至るまでには、大臣の承認を受けたうえで進級会議にはかる必要もあるとはいえ、たとえば「海軍士官人事に関する局長説明」（防衛研究所―参考⑧―人事―一九九）を見る限り、整理（淘汰）対象者についての詳細な説明をつけた人事局からの提案は、九五パーセント以上の確率でそのまま了承されており、一旦、人事局案という形を成したら、もはや変更は難しい構造があったようである。

ただし人事局案は、正式に進級会議へ出される以前の段階では、ある程度、変更されたらしい。たとえば人事局第一課長や人事局長を歴任した清水光美は、人事局から大角海軍大臣に対して再三上申した人事が実行されなかったことや、伏見宮軍令部総長が「私は人事のことに就いていろいろ言った。しかし、…今まで言ったことは全部取消す、白紙にせよ」と述べたことなどを証言している[50]。こうした介入と同様、進級会議に列席予定の有力者（艦隊や鎮守府の司令長官）の意向は、かなり詳細に聞き取りされ、最終的な人事案に生かされたと考えられる[51]。つまり人事局案が進級会議をほぼ無修正で通るのは、事前の綿密な情報収集・意見聴取に基づくものだからという側面が大きい。とくに会議出席予定者の意見を重視した処理をする過程で、堀の人事についても方向性が変わっていった可能性は十分に考えられる（その「重視」の仕方というのは、人事局長の胸先三寸なわけだが）。

このような過程の末に堀の左遷人事は発令されるに至ったのだが、阿武のその後について簡単に触れておこう。吉田善吾などを中心とした堀を擁護するグループのなかに、嶋田繁太郎から堀へ軍令部第一部長の地位を譲ることで堀を救うというプランがあったことは、別稿で述べた通りである。結局は実現しなかったのだが、皮肉なことに嶋田の後任の軍令部第一部長には、当の阿武が収まる結果となった。堀の失脚をめぐる一連のゴタゴタもあって疲れ切っていた嶋田は、部長職を退いた後、朝鮮・中国を一ヶ月かけて旅行して心を癒やしている。自分の後任が他ならぬ阿武だったことに関して、この頃の嶋田がどの様に感じたかは不明である。しかし長旅から帰国した際のことを「帰ったら、軍令部第一部長に親任（新）したばかりの阿武清少将が死んでいた」[52]と、わざわざ阿武の最後に触れてみる点、嶋田にしては含みを感じさせる表現といえる。

いずれにせよ、阿武は長生きしても海軍における出世は望めなかっただろう。堀の左遷人事に関わった人事局長としては、堀に好意的な対応を見せた小林宗之助ですら、先述した様な最後を迎えている。阿武の場合、下手をすれば吉田善吾海相（一九三九年八月～一九四〇年九月）の段階で、退役に追い込まれた可能性も高いのではなかろうか。

第七節　山口県の事例　③石川信吾

つぎに、石川信吾について検討しておこう。堀排斥運動が高まりを見せた一九三三～三四年頃、石川は軍令部員や戦隊参謀の地位にあった。この時期の彼は、堀失脚の最大の要因（加藤寛治の堀への不信感）を生み出すきっかけを作っている。具体的には「石川信吾来り、予に人事之決心を促す。井上成美[53]の奇怪なる談を報ず。小林と堀の末次排斥なり」（『加藤寛治日記』昭和七年九月三日条）という記事によれば、小林躋造（連合艦隊司令長官）と堀（第三戦隊司令官）を首謀者とする「末次排斥」運動が存在し、対応を誤ると加藤自身の失脚にもつながりかねない危険性があるという情報を伝えたのである。別稿で詳述するように、堀失脚の主要因は加藤の圧力であり、この日の石川によるご注進はその引き金と位置づけられる。

ところが当時の関連史料を見る限り、このような排斥運動が実在した可能性は低い。それでは石川がどの様な意図から、こうした情報を加藤に知らせたのかが問題となる。この時期の石川の立ち位置に関しては、「末次と石川との親密さ」[54]などの指摘をふまえれば、加藤派＝艦隊派の一員というよりも、末次個人の子分と考えた方がいい。とすれば、ここでなされたご注進も末次（あるいは末次・石川の合作）の脚本という可能性が想定される。『加藤寛治日記』によれば、当時の石川と加藤との面会回数が少ないのは、末次や高橋を押さえて堂々のトップである[55]。末次の訪問回数が少ないのは、末次の伝えたい情報を石川が代わって伝えていた可能性を示しているのではなかろうか。おそらく加藤は、末次―石川ラインの計画に乗せられるかたちで、自覚のないまま末次の政敵である堀排斥運動に駆り出されたのである。

攻撃対象とされてしまった堀自身は、こうした構図を「回顧録」（『堀悌吉資料集 三』）のなかで冷静に分析している。おそらく、ここに記されたよう

な現象が、当時の海軍部内において再三にわたって起きていたのであろう。

加藤寛治氏ハ…元来ノ悪人デハナイ。唯賑ヤカナ事ノ好キナ威張ツテ見タイ自惚心ノ強大ナル稚気満々ノ野心家デアル。末次ヤ高橋三吉等ニ操ラレテ踊ツテ居タニ過ギナイ。末次氏ガ何カノ時ニ「将軍ニウッカリ言フト、スグ白鉢巻ダカラ気ヲ付ケナクチャ」ト云ッタノヲ記憶シテ居ル。

なお念のため言及しておくと、この文章で艦隊派の両翼の一人として末次と共に非難を受けている高橋三吉は、少なくとも石川のこうした性癖に好意的ではなかった。たとえば豊田貞次郎（軍務局長）の失言を「石川(信吾)が聞きつけ…人事局長や加藤大将に告げ」て回って追い落とそうとした際、当時、軍令部次長の地位にあった高橋は同調せず[56]、加藤から「説諭」を受けている（『加藤寛治日記』昭和七年五月二日条）。このほか高橋が条約派へ融和的な行動をとり、「高橋次長、小林（躋造）を推薦する傾あり。不可解」（『加藤寛治日記』昭和七年九月五日条）と評される場合もあった。

ともあれ堀を失脚させることには成功し、海軍部内における末次たちの威勢はピークを迎える。ところが、この後、様々な要因から彼らの影響力は縮小の一途をたどり、結局、石川は二・二六事件の際、これまでの様々な政治的活動も災いして軍を追われかねない立場に置かれてしまう[57]。ここで石川を救ったのが、岡敬純（一八九〇～一九七三）である。岡は攻玉社の先輩であることに加え、山口県出身者でもあり、そうした点で両者の関係はきわめて深いものがあった。こののち、周囲の反対を押し切って石川を軍務局第二課長に栄転させたのも、岡だった[58]。戦争末期、長らく岡―石川ラインを重用していた嶋田繁太郎海軍大臣が失脚した際、新たに教育局長となった高木惣吉が岡の部屋に挨拶に赴いた際も、岡は石川と密談の最中だったという[59]。このほか石川の政治家・高級官僚との関わりについても指摘されているが、対象が山口県出身者に偏っていることは指摘できる。松岡洋右（一八八〇～一九四六）[60]、木戸幸一（一八八九～一九七七）[61]、岸信介（一八九六～一九八七）[62]など、その具体例といえる。

このように末次全盛期には彼の意に沿って反対派を失脚させ、岡が台頭すればそれを支えることで部内における自分の地位を確立する。また並行して、各界における山口県出身者とのつながりを生かし政治的策動を繰り返すというのが、石川のやり方だった。そうした戦時中の華やかな活動とも関係するのだろう、晩年は寂しいものだったらしい[63]。同輩・後輩の回想のなかで、石川の過度に山口県出身者を意識した行動が、つねに強い違和感をもって語られていることからも分かるとおり、彼の同郷意識は世代的にみて先祖返りに近いものがあった。それが組織の運営に際して、結果的にプラスに働かなかった以上、彼に対する後世の否定的な評価はやむを得ないところがあろう。

第八節　山口県の事例　④沢本頼雄

最後に付け加えておくと、堀の「回顧録」（『堀悌吉資料集　三』）にもあるように、海軍部内の山口県人が一致団結して堀を攻撃していたというわけではない。あくまで末次の周囲に集まった山口県人が、末次の方針に沿って堀を攻撃していたに過ぎない。

勿論末次氏ト同郷ノ人ト雖モ、自分ノ真ノ友人デ特別ニ好意ヲ持ツテ居ルモノモ沢山ニ居タ。前原・三戸・仲村・朝枝氏等ノ級友ハ素ヨリ、次ノ級ノ羽仁六郎、其ノ他佐古良一・沢本頼雄氏等ハ其ノ人々デアツテ、是等ノ人々ハ終始変ラヌ友情ヲ示シテ呉テ居ル。

ここで並んでいる人びとのうち、最後に挙げられた沢本頼雄との関係について取り上げておこう。沢本（一八八六～一九六五、三六期）は、玖珂郡錦見村（近世は岩国藩領。現在の岩国市）の出身で、沢本浪平の三男。岩国中学校を出て、海軍兵学校に入学した。追悼録によれば、「真摯な性格／責任感の強い」（清水光美　同期）・「明敏透徹／博覧強記／合理的」（山梨勝之進）・「謹厳で、図抜けて頭のいい人だから筋の通らぬことは一切許さぬ」（福留繁　部下）などと評される人物である[64]。

現役時代は、堀の軍務局長時代に軍務局第一課長として支えるなど、近しい関係にあった。堀がワシントン軍縮会議で出張中（一九二一年）には、堀の家に住み着き、その期間に生まれた長男は、堀の出張先ワシントン（華盛頓）にちなんで「太華生」と名付けている[65]。沢本自身の回想によれば両者の交流は戦後も続き、堀を中心に沢本が幹事を務める麻雀会を毎月のように実施していたという[66]。親分・子分のような関係を嫌っていた堀ではあったが、沢本自身も「最も敬服すべき先輩として師事」していたと述べているように、ここに見える堀と沢本の関係は極めて近しいもののようである。こうした人間関係を見ても、堀と山口県人の相性が悪かったとは言い切れず、先に取り上げた山

口閥による堀攻撃は、末次との人間関係の悪化を大きな要因としている可能性が高い。地域閥のおぞましさは、こういう所にも現れている。

おわりに

「はじめに」で紹介したように、海軍では兵学校における教育課程から、県人としての自覚を強化するような催しが組まれていた。そうした方針が様々な弊害をもたらしているという認識は、部内で次第に共有されていった。

兵学校において、先に紹介したような慣習が打ち切られたのは、昭和に入ってからである。吉田俊雄（五九期）の回想に、その経緯が記されている(67)。

私が海軍兵学校に入校するまで、…県人会の集まりが、同期生の集まりに次いで重味を持っていた。いや、ある人たちにとっては、上下が逆だったかもしれない。私たちが入校した当座は、県人会が聞かれて、新入生は大いに歓迎され、「困ったことがあったら、いつでも言うて来ヤイ」と、お国弁をわざわざ使って言ってくれた。そうしたら、しばらくすると、県人会禁止令が出た。同県人だといって集まるのは、弊害が多い。海軍士官は、同期生会だけでよい、といわれた。そんなことで、古参の士官たちの中での同県人の連帯感は、とても私たち、終戦時中佐くらいの年格好の者の想像を越えていた。

兵学校において県人会が禁止される時期については『海軍兵学校沿革』・『同 続』などに該当通達が見当たらず、正確な時期は不明である。ただし吉田俊雄（一九〇九～二〇〇六）在学中の出来事なので、一九二〇年代末と推定されよう。この時期の兵学校校長は、鳥巣玉樹・永野修身などだった。彼らは本省の人事局第一課長の経験者で、出身地を意識しすぎることの弊害を熟知した立場からの通達だったと考えてよい(68)。その後、海軍兵学校における生活に関するルポの類のなかにも、その種の要素は見いだせなくなる(69)。

とはいえ日本海軍を領導していたのは、その最末期まで出身県とのつながりを重視する世代だった。吉田も回想するように、そうした弊害を多少なりとも改善できた世代は、終戦時にせいぜい中佐程度まで昇進したに過ぎない。本稿で紹介した地域閥は、場合によってはプラスに働いたこともあろうが、全体としては様々に海軍という組織の機能不全を促進させたといわざるをえない。海軍は、最後までその制約から逃れられないまま、終焉を迎えたのである。

1）海の中尉（浜口鶴雄、海軍兵学校四〇期）『江田島生活』武侠世界社、一九一六年。
2）大西新蔵「東京府平民」『海軍生活放談』原書房、一九七九年。
3）菊村到『提督有馬正文』新潮社、一九七〇年。
4）本稿は、別稿「昭和初年における海軍条約派の退潮―堀悌吉中将の失脚過程を中心として―」（『山口県立大学 国際文化学部紀要』二五、二〇一九年）の補論に当たる。そのため、別稿と関連する局面の検討を中心とする。
5）豊田副武『最期の帝国海軍』世界の日本社、一九五〇年。
6）「馬糞」発言について、寺崎隆治は「海軍反省会」五回（『海軍反省会』一巻二〇〇頁）・四六回（同書六巻一三〇頁）で、大井篤は一一八回（同書一一巻二八八頁）で指摘する。（以下、戸高一成編『海軍反省会』（ＰＨＰ出版社）については、【開催回、発言者、刊行巻、該当頁】のデータを挙げる）。「けだもの」発言については、杉本健『海軍の昭和史 提督と新聞記者』（文芸春秋、一九八二年）の指摘が参考となる。
7）「海軍反省会」一〇九回（『海軍反省会』一〇巻五九九頁）・一三〇回（同書一一巻六七二頁）に紹介される及川古志郎の直話（大井篤の証言）による。
8）「海軍反省会」一〇九回（『海軍反省会』一〇巻五九九頁）における大井篤証言。同様の見解は、吉田俊雄「軍令部総長と軍令部」（『四人の軍令部総長』文芸春秋、一九八年）にも見える。
9）阿川弘之『米内光政』（新潮社、一九七八年）。この部分は、阿川が麻生氏から直接聞き取りした情報によるという。
10）ちなみに一九四五年八月に阿南が自決し、続く東久邇宮内閣で下村定（高知）が後継陸相となった後、戦艦ミズーリの艦上で降伏文書に署名したのは、外相：重光葵（大分）・参謀総長：梅津美治郎（大分）の二名である。このうち重光は、堀・豊田らの中学の後輩に当たる。
11）沖修二編『阿南惟幾伝』講談社、一九七〇年。
12）迫水久常『大日本帝国最後の四か月』オリエント書房、一九七三年。
13）両者の信頼関係について、たとえば額田坦『陸軍人事局長の回想』（芙蓉書房、一九七七年）は、「阿南大臣はその後一再ならず、筆者に対し、「総理はすべてよくお分りになっている」と、すこぶる意味深長に申されてい

た」と回想する。

14）額田注13著書。

15）有末精三「参本第二部からみた終戦前夜」上法快男編『最期の参謀総長梅津美治郎』芙蓉書房、一九七六年。

16）豊田注5著書。

17）堀悌吉「備忘録」『堀悌吉史料集 二』大分県教育委員会、二〇〇七年。

18）「海軍反省会」八回における矢牧章証言（『海軍反省会』一巻三二五頁）。

19）鈴木彦次郎「努力・努力・努力」高橋三吉編『米内光政追悼録』米内光政銅像建設会、一九六一年。

20）金田一京助「米内大将追慕」高橋三吉編『米内光政追想録』米内光政銅像建設会、一九六一年。

21）赤松貞雄『東条秘書官機密日誌』（文芸春秋、一九八五年）は「板垣・東条両将軍は同じ岩手県出身であり、親しい間柄」とする。両名共に、先祖が南部藩出身の士族であることは、この際の人事と少なからず関係してこよう。

22）井上成美「海上自衛隊幹部学校長との座談記録」井上成美伝記刊行会編『井上成美』同会、一九八二年。

23）岡田啓介『岡田啓介回顧録』毎日新聞社、一九七七年。

24）「海軍人事取扱内規綴」（防衛研究所⑧参考―人事―一九五）の「人秘昭和四年一月廿二日 鈴木大将侍従長親任ニ関スル経過覚」（六三八頁）によれば、岡田が早い段階で海軍内部だけでなく、宮中にも鈴木の後任を加藤にする旨の了解を求めていたことが分かる。なお井上注22著書が、「岡田さんなんかも、ちゃんと派閥人事（※出身地を重視した人事）をやっておられた」と述べているのは、こうした人事を指しているのだろう。

25）坂井一位「加藤寛治大将と長谷川さん」寺崎隆治編『長谷川清伝』同刊行会、一九七二年。

26）ただし岡田のこの種の活動について、議会でも「岡田大将ハ何ノ資格ニテ首相ト会見セリヤ」などと問題視される場合が生じたらしく、堀は軍務局長として「昭和六年二月 岡田大将ノ言動ニ対スル弁明」（『堀悌吉資料集 一』）というメモを作製している。

27）坂井景南「加藤、岡田両大将の宿命的な相剋」『英傑加藤寛治』ノーベル書房、一九七九年。

28）「海軍反省会」八回における矢牧章証言（『海軍反省会』一巻三二五頁）。

29）伊藤隆ほか「平泉澄インタビュー」（『東京大学史紀要』一三～一八、一九九五～二〇〇〇年）において、平泉は岡田について「初めは私のおじのような人ですけれども…」・「岡田さんにはいいところもあった。しかし、根本は間違っておる」と述べている。この件については、平泉澄『悲劇縦走』（皇学館大学出版部、一九八〇年）も参照。

30）坂井一位 注25論文・岡田注23著書。

31）塩沢については、とりあえず細川修「塩沢幸一―海なし県信州ただひとりの海軍大将―」（深志同窓会編『深志人物志』同会、一九八七年）を参照。なお、航空本部長をめぐる人事については、別稿を参照。

32）たとえば人事に公平性を期すため、明治後期以降、鹿児島・佐賀・高知の出身者を人事局長に就けないという内規が作られ、人事局第一課長や人事局員についても原則的に同様とされた（清水光美証言、水交会編『提督達の遺稿 上』水交会、二〇一〇年（以下『提督』と略称）・「海軍反省会」一一八回における末国正雄・千早正隆証言（『海軍反省会』一一巻三二六頁）。それほどに、地縁と人事のつながりは警戒されていた。

33）祖父江孝雄『県民性』中央公論社、一九七一年。

34）山本の強い郷土愛については、たとえば山本義正『父 山本五十六』（朝日新聞出版、二〇一一年）を参照。

35）たとえば戸塚道太郎証言（『提督 下』）には、小林から「戸塚君、堀さんといっぺん夕飯を喰ってくれ」と言われたことが記されている。

36）ただし小林の人物が、堀たちと似通っていた訳ではない。切れ者という評価が相応しい堀・古賀に対し、小林は「生真面目」で「コツコツと勉強する」人物だった（伊藤金次郎「軍艦「足柄」と小林」『陸海軍人国記』芙蓉書房出版、一九八〇年、初出一九三九年）。その性格は、『水交』二六三（一九七五年五月）の特集「故 小林宗之助中将を偲ぶ」において、「端正な姿勢の内に笑顔を湛えて、自然のうちに皆を魅きつけねばおかぬ人」（北条釐三郎・同期）・「厳正なる一面笑顔を以て接せられる温容」（西川速水・一期先輩）・「宏量大度、部下を信じて疑われず、常に謹言寡黙」（森徳治・部下）などと説明される。

37）高木惣吉『自伝的日本海軍始末記』光人社、一九七一年。

38）高木注37著書。
39）舞鶴鎮守府で参謀長として仕えた高木惣吉は、退役予告を意味する閑職に回されてやる気を失っていた小林の状況を記している（高木注37著書）。
40）鎌田芳朗『海軍兵学校物語』原書房、一九七九年。
41）末次の人生全体を対象とした伝記は小川宣『空前絶後―長州の海将と十五歳の二等兵―』（同人、二〇〇八年）があるくらいだが、事実誤認も少なくない。とりあえずは伊藤隆「艦隊派総帥末次信正」（『昭和期の政治 続』山川出版社、一九九四年、初出一九七六年）・秦郁彦「末次信正」（『昭和史の軍人たち』文芸春秋、一九八二年）などを参照。
42）堀の失脚に関係する諸情報は、無役の堀が独自に入手できるものではなく、要職を占めていた同期生（嶋田・古賀ら）の情報を整理した結論だろう。
43）詳細については、別稿を参照。
44）各人の履歴については、末弘錦江『防長人物百年史』（山口県人会、一九六六年）が詳しい。このほか山県については、山県正郷『ある提督の回想録』（弘文堂、一九六六年）・徳原啓『徳高物語』（鳳鳴館、一九七八年）などを、石川については石川信吾『真珠湾までの経緯―開戦の真相―』（時事通信社、一九六〇年）・秦郁彦「石川信吾」（『昭和史の軍人たち』文芸春秋、一九八二年）・森山優「石川信吾日記―開戦前夜の六ヶ月間―」（『中央公論』一〇七―一、一九八一年）などを参照。
45）防衛庁防衛研修所戦史室「軍縮条約と条約下の軍備補充計画」『海軍軍戦備一』朝雲新聞社、一九六九年。
46）防衛庁防衛研修所戦史室「海軍軍縮」『大本営海軍部・連合艦隊 一』朝雲新聞社、一九七四年。
47）「海軍反省会」一二二回における曽我清と大井篤のやりとり（『海軍反省会』一一巻五三〇頁）。なお岩村家（上渋谷）から阿武家（三軒茶屋）までは路面電車（玉川電鉄）で三駅とはいえ、友人づきあいをしている訳でもない岩村に自宅まで抗議に来られた阿武は、かなり驚いただろう。なお、「吉田少将ニ、昨夜人事局長ト会見ノ件ヲ知ラス」（十一月八日条）とあるところからは、岩村一人の判断による行動と知れる。
48）退職・整理に関する書類は、毎年の会議直後に廃棄されたらしくほとんど残されていないが、局内の引き継ぎ書類に含まれる形で一部が現存する（防衛研究所―参考⑧―人事―一九三・一九九ほか）。また「海軍人事取扱内規綴」（防衛研究所―参考⑧―人事―一九五）の「第九類　事故者取扱、予後備役編入手続、及身上取扱」に関連書類が連綴され、このうち「将官ノ予備役編入ニ関スル覚」（四六九～四七一頁）は、末国正雄「海軍人事局内規」（海軍歴史保存会編『日本海軍史 五』第一法規出版、一九九五年）に翻刻される。
49）三戸寿証言『提督 下』・「海軍反省会」一〇八回における末国正雄証言（『海軍反省会』一〇巻五八四頁）。
50）杉本注6著書・清水光美証言『提督 上』。
51）たとえば佐官以下の人事に関しては、「海軍人事取扱内規綴」（防衛研究所―参考⑧―人事―一九五）の「二、進級会議関係事項 覚」（一三八頁）の「一、進級会議迄ノ準備事項」に、「六月上旬　各科進級打合セ会議／六月下旬　第一回局内会議「夏期ノ局員出張前ニ開催シ、局員ハ同年度ノ進級・整理ニ関スル概略ノ復案ヲ得テ出張シ得ル如クスルヲ便トス」／七月以降／第二回局内会議　進級整理者決定／第三回局内会議　進級順序決定／第四回局内会議　考課摘要及説明案決定／第五回局内会議　総括審議　局長決裁」とある。これによれば、人事局案を「局長ヨリ大臣ニ説明」する以前、各地への出張からはじまり、計五回にわたる局内会議を経て決めていることが判明する。
52）嶋田繁太郎証言『提督 上』。
53）井上は当時海軍大学校の教官で、十一月に軍務局第一課長となる。この後も「井上成美は石川を買っていた」（「海軍反省会」九八回における保科善四郎証言（『海軍反省会』巻一〇―二六八頁）が、石川が自分の発言を使って尊敬する堀を失脚させたのを知っていただろうか。
54）大井篤「ファシズム下の新見さんと私」刊行会編『提督新見政一』原書房、一九九五年。
55）『加藤寛治日記』への石川の登場頻度に関しては、秦郁彦「艦隊派と条約派―海軍の派閥系譜―」（三宅正樹編『軍部支配の開幕』第一法規出版、一九八三年）を参照。石川注44著書の「私なども、加藤・末次直系の青年将校ということで、何度もリストにのせられたことがあった。…しかし、それを派閥と見るのはひがめであり、ゆきすぎであった」という述懐は白々しい。

56）高橋三吉証言『提督 上』。
57）石川注44著書。
58）岡と石川の関係については、「海軍反省会」九八回における大井篤・豊田隈雄証言（『海軍反省会』一〇巻二六八頁）・吉田俊雄「石川信吾」（『海軍参謀』文芸春秋、一九八九年）などを参照。
59）高木惣吉『私観太平洋戦争』文芸春秋、一九六九年。
60）たとえば手嶋泰伸「調査課によるブレイントラストの設立とその影響」（『昭和戦時期の海軍と政治』吉川弘文館、二〇一三年、初出二〇〇九年）や、「海軍反省会」一〇八・一一一回における大井篤証言（『海軍反省会』一〇巻五七三・六四八頁）などは、両者の関係が山口県出身だからと指摘する。
61）杉本注6著書は、石川が木戸幸一と密接だったことを指摘する。
62）「矢部（貞治）嘱託の情報では岸（信介）は寺内（寿一）を担いで長州内閣を狙ってることが判り、東条大いに怒り」（『高木惣吉日記』昭和十九年七月十五日条）という記載や、高木惣吉『自伝的海軍始末記』（光人社、一九七一年）の「このころ岸信介、石川信吾少将らは寺井戸義道、是松準一氏らと寺内大将を頭とする長州内閣の工作に奔走していると伝えられたが、東条打倒で一致しているから、それもよかろうと傍観することにした」との指摘を参照。
63）伊藤隆ほか注29論文で、平泉は石川について「気の毒な死に方」と述べる。
64）『水交』四六（一九六五年八月）の特集「故沢本頼雄先生追悼記」による。このほか、彼については伊藤隆ほか「沢本頼雄海軍次官日記―日米開戦前夜―」（『中央公論』一〇三―一、一九八八年）・同「沢本頼雄海軍次官日記―東条内閣崩壊の序章―」（『軍事史学』二五―二、一九八九年）なども参照。
65）三浦節「沢本頼雄海軍次官の日記」『私感 大東亜戦争』元就出版社、二〇〇八年、初出二〇〇二年。
66）沢本頼雄「堀さんの思い出」広瀬彦太編『堀悌吉君追悼録』編纂会、一九五九年。
67）吉田俊雄「石川信吾」『海軍参謀』文芸春秋、一九八九年。同じ頃、陸軍でも広い範囲で同様の懸念が共有されるようになっていた。陸軍大学の教官が、「海軍大学は薩摩出身者をとらない、という話をきいたが、自分の方では長州閥をつくらせないために長州は絶対いれない」と述べたという証言（福田良三「海軍教育」中村菊男編『昭和海軍秘史』番町書房、一九六九年）も参照。
68）昭和七年（一九三二）卒業の海兵六〇期生を引率して遠洋航海に出た百武源吾中将が、世界各地で県人会が出身地の乗組員を歓迎しようとした際、自分は勿論、部下に関しても歓迎を辞退させようとする姿勢を貫いたのも（石井稔編『異色の提督 百武源吾』刊行会、一九七九年）、同様の趣旨からだろう。
69）豊田穣（六八期）『江田島教育』新人物往来社、一九七三年・生出寿（七四期）『海軍兵学校よもやま物語』光人社、一九八四年。

日本海軍における出身地と人間関係
―堀悌吉中将の失脚と関連して―

昭和戦前期までの日本社会において、出身地を同じくする人間の間の紐帯は非常に強く、それは現代人から見ると理解しがたい程のレベルだった。そしてそうした紐帯は、時として組織を不条理な方向に動かす威力すら持っていた。本稿では、戦前期の日本海軍を素材として、とくに大分・岩手・福井・長野・山口県出身者の事例を取り上げて、地縁による紐帯の実態を分析する。

Birthplace and Interpersonal Relationships in the Japanese Navy: In Connection with the Downfall Process of Vice Admiral Teikichi Hori

In the first half of Showa Period people were much more bound together by a shared territorial bond than in contemporary era. Such networks sometimes had irrational effects in the society. This paper Gives a focus on Japanese Navy and takes Iwate, Fukui Nagano and Yamaguchi as examples. We examine how these interpersonal relationships functioned in these regions.